

2025 年度重点研究報告書 済州オルレとその福山市への適用

澤田結基・林聡太郎・松浦正伸

1. はじめに

オルレとは「家に帰る細い道」という意味を持つ韓国・済州島の方言である。済州島では、ルート上で自然と文化を学ぶことができるトレッキングコースが整備され、その名称としてオルレが用いられている。オルレの取組は観光施策として成功を収め、日本でも「九州オルレ」として展開が始まっている。オルレのコースは 10–15km 程度に設定され、ルート上にある町並みや文化財、自然景観を楽しみながら学び、健康増進にも役立つよう設計されている。

福山市内には、鞆の浦から阿伏兎へのコースや山野峡など魅力ある遊歩道が存在するが、これらが観光や生涯学習、健康増進へ活用されているとは言い難い状況にある。例えば鞆の浦であれば古い町並みを通り、海岸から山へ登り、瀬戸内海の風景を楽しみながら阿伏兎観音へ至るコースなど、魅力ある「オルレ」を構築することができると考えられる。

本研究では、済州島オルレの現状を、観光・健康増進の観点から分析し、その成功の背景を探る。また、九州オルレにおいては上記の観点のほか、オルレを通じた国際交流についてヒアリング調査を行う。これらの結果をもとに福山市内の既存の町並みや遊歩道を調査し観光と、市民の健康の保持増進に活用できるオルレコースの仮設定を試みる。

2. 済州オルレ

2-1. 済州オルレの概要

済州オルレは民間組織によって運用されている点でユニークである。済州オルレは徐明淑（ソ・ミョンソク）氏によって創設された。家族や住民が反対するなか、当初は徐氏に賛同する仲間と共に遊歩道が整備されていったという（小笠原・中嶋，2015）。2007 年に社団法人済州オルレを設立して理事長に就任し、ボランティアの力を借りながらオルレの開発が進められた。2012 年には現在利用されている 26 コース、総距離 412.7km のコースが完成した（図 1）。

オルレのコースには、馬をモチーフにしたカンセと呼ばれる道標や、ルートであることを示すリボンが設置されている。スタート・ゴール地点および中間地点にはスタンプが置かれ（写真 1）スタンプ帳へ押すことで歩行したことを証明するようになっている。



写真1 スタート地点にあるスタンプ台



写真2 オルレコースを示すリボン

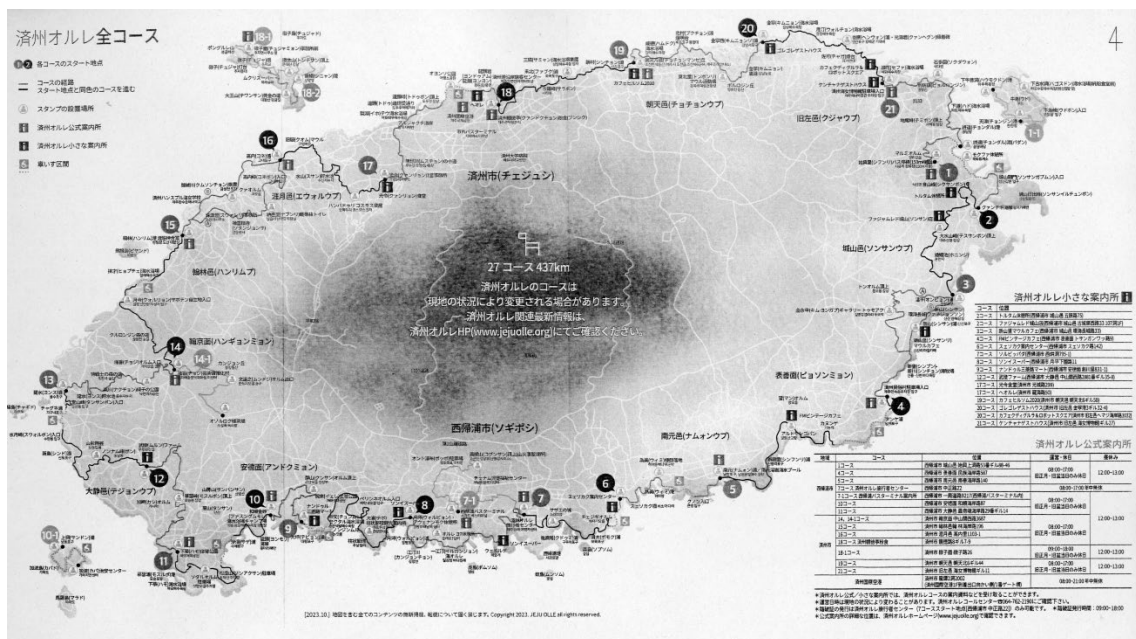


図1 済州オルレの配置図（済州オルレ 日本語版パンフレットより抜粋）

2-2. 済州オルレ事務局長へのインタビュー調査

2026年9月13日、社団法人チェジュオルレ本部を訪問し、事務局長へインタビュー調査を実施した。その要点を表1にまとめる。

インタビューから明らかになったこととして、済州オルレが観光業を中心とする地域の経済活動へ大きく貢献していること、ボランティアに支えられて運営されていること、オルレ利用者の多くは韓国本土からのビジターであり、地域との連携には課題が残ることが挙げられる。地域の経済活動への貢献について、カフェや民宿が増えている点は、日本国内で行われている様々な観光の取組が目指している姿とも重なり、参考になるだろう。

また、済州大学とのタイアップ事業は興味深い事例である。このタイアップでは、教員と

進路などの悩みを持つ学生と一緒にオルレを歩くことで、学生の悩みの解決を図ろうとする事業が行われており、して単位認定もなされている。教員と学生が時間や体験を共有することで雑談を促す試みは、専門家によるカウンセリングとは異なったアプローチであり、遊歩道を利用するユニークな取組である。

表1 済州オルレ事務局長へのインタビュー結果

項目	回答の概要
利用者の満足度を上げるための方策	道をきれいに保つ 200年よりクリーンキャンペーン実施 ごみ拾いでスタンプ・バッジの提供
ボランティアについて	約3000名 60-70%は韓国本土、残りが済州島民 オルレを通じて文化・歴史を学べるアカデミープログラム ボランティアによる子どもイベントの開催
大学とのタイアップ	済州国立大学とのタイアップ オルレを歩きながら、教員が学生の人生相談や進路相談にのる（単位認定あり）
運営組織	理事会は10名で、会員が意思決定に関わる 外郭団体が4つあり、清掃活動の団体や完歩者の団体が含まれる
運営資金	オルレのサポーター制度の会費（2000名） 企業サポーターから協賛金を得ている
オルレと地域社会	済州オルレが火付け役となって、韓国内にトレッキングブームが起きた 山岳地帯はすでに観光地化されており、これ以上の開発によって問題が生じる懸念があるので、海岸線を中心にオルレを設定した オルレ沿いには利用者向けのカフェ、民宿が増えている オルレができたことで観光客が増加し、市場が活性化した 市場の名称が「毎日市場」から「オルレ市場」になった
海外展開	九州オルレ、宮城オルレは実績もあり行政も協力的で、うまくいっている モンゴルにもオルレがある。観光の国際協力機関(KOICA)のサポート事業になっている 3コースあるが、運営はまだうまくいっていない 中国にもオルレをつくる動きがある

2-3. 済州オルレの踏査（第8, 第10コース）

合計26コースあるオルレのうち、第8コースの踏査を実施した。第8コースは宿泊していた西帰浦市街に近く、済州ユネスコ世界ジオパークの主要なサイトである柱状節理の海岸を含んでいる。スタート時点では曇りだったが次第に雨が強くなり、総距離19.6kmのうち半分を歩いたところで大雨のため離脱した。

コースは当初、沖縄のような石垣に囲まれた民家が並ぶ集落を通り、畑の続く農村地帯へ入る。道は入り組んでいるが、カンセヤリボンの案内標識はしっかりしており、迷うことはなかった。海岸線にでるとコンクリート舗装された遊歩道となり、黒い玄武岩質溶岩の海岸を通過し、柱状節理の見学サイトへ到着した。観光用の広い駐車場とお土産店が並んでおり、よい休憩場所になっていた。柱状節理をすぎると溪谷を大きく迂回するようにルートが設定され、中間地点（中間スタンプ設置場所）のペリンネ公園へ到着した。ここからルートはリゾートホテルが立ち並ぶエリアの道路沿いを通して再び海岸線へでるが、ここで大雨のためコースを離脱した。

第8コースでは設定されたコースの半分強を歩いたが、そのなかには伝統的な農村風景、荒々しい溶岩が構成する海岸風景、城郭遺構など多様なテーマが展開され、飽きることがなかった。点在する自然、文化、歴史のサイトがオルレコースの線で繋がれたような構成であり、オルレ利用者がウォーキングを通じて済州島を深く理解できるような導線と言えよう。

松岳山の横を通る第10コースは、旧日本軍の航空機地跡を通過するように設定されている²⁾。ルートはかつての滑走路の上を通り、飛行機の格納庫等の軍事施設跡を見学できるように設定されていた。こうしたルートは、済州島が辿ってきた近代史への興味を喚起するように作用していると考えられる。第10コースの中には、韓国の負の歴史である4・3事件（1948年、武装蜂起した統一国家勢力を鎮圧する軍警、右派団体が済州島住民を虐殺した事件）の遺構も含まれており、済州島の近代史と向き合おうとするメッセージが込められているようにみえる。

3. 九州オルレ

3-1. 九州オルレの概要

九州オルレは、観光客の誘致とリピーターの獲得に成功した済州オルレの制度を導入した九州の遊歩道システムである。2011年に九州観光推進機構が済州オルレと業務提携を結び、韓国人旅行者を九州へ誘致するための取組として始まった。現在は九州全域に17コースが設定されており¹⁾、済州オルレと同様のパスポート（スタンプ帳）が発行されるなど、済州オルレに準じた運営が行われている。

3-2. 九州オルレの踏査

九州オルレのうち、長崎県南島原町に設定されている「南島原コース」の踏査を行った。調査日は2025年11月17日である。南島原コースは全長10.5kmあり、口之津港から畑の

広がる野向地区、田尻海岸公園を通り、あここの巨木や玄武岩の海岸、口之津灯台を巡って口之津の町へ戻るコースが設定されている。このコースには海岸地形と植生、市街地と農村部の風景など南島原の多様な景観が含まれており、済州オルレと同様のコンセプトをもってコース設定がなされたことがうかがえた。

4. 福山市における徒歩歩行ルート案の設定

4-1. 考慮すべき項目

これまでに設置されてきた遊歩道や登山道と比較して、オルレには次のような特徴がある。

- 1) 市街地、農地、史跡、自然景観の美しい場所など多様な景観を包有する。
- 2) 既存の道路（遊歩道を含む）を利用してコースを設定する。
- 3) スタートとゴールへ公共交通機関でアクセスできる。

以上の特徴を満たすルートを設定する対象地域として、本研究では福山市鞆町とその周辺を取り上げる。鞆町は瀬戸内海国立公園の当初指定範囲に含まれ、その指定の背景には多島海の景観を眺める展望地として高い評価を受けたという事実がある（澤田，2022）。鞆町には、国立公園指定に前後して遊歩道も整備され、市街地の背後にある後山から海後山、阿伏兎へ至るルートが設置されている。しかし、これらの遊歩道は放置されており、鞆を訪れる観光客が利用できるような状況ではなく、極めて残念な状況にある。

ルート案を図2に示す。スタートは鞆町中心部にある鞆港バス停とした。ここから観光のシンボルになっている常夜灯を通り、細い路地から県道へ抜け、淀姫神社から平地区の海岸線を通過する。平地区から車道へあがり、大室浜の砂浜へ至る。大室浜から遊歩道へ入り、海後山の山頂を通って見晴らしのよい稜線を歩き、灯台経由で阿伏兎観音とバス停のある阿伏兎岬をゴールとする。このルートは鞆中心部の伝建地区、平の淀姫神社、大室浜の砂浜、ウバメガシの森や海後山山頂の風景など多様な景観を包有し、鞆と阿伏兎をつないでいる。全長は約6.3km、最高地点との標高差は約150mあり、大人の足で3-4時間程度かかる。利用には看板の設置や荒れた遊歩道の整備など多くの課題があるが、日本ではまだ普及したとは言えない徒歩観光に適したルートである。まずはガイドが案内するコースから運用を始めるなど、今後の活用を期待したい。



図2 那覇市のコース案 スタートは那覇港バス停，ゴールは阿伏兎に位置する。

注

- 1) 「九州オルレ」, <https://kyushuolle.welcomekyushu.jp>
- 2) 「済州オルレ～徐明淑(ソ・ミョンスク)理事長と歩く済州オルレ第10コース」, 在済州日本国総領事館, https://www.jeju.kr.emb-japan.go.jp/itpr_ja/11_000001_00110.html

引用文献

小笠原正志・中嶋健 (2015), 民間非営利団体が創設し運営管理する済州島周回長距離トレイル「済州オルレ」徒歩旅行ブームの実態. スポーツ産業学研究, 25, 61-73.